平成16年3月26日
発行　新潟国際情報大学

国際・情報

INTERNATIONAL & INFORMATION

新潟国際情報大学広報　第22号

（本校）〒950-2292 新潟市みずき野3丁目1番1号　tel 025-239-3111 fax 025-239-3690
（新潟中央キャンパス）〒951-8068 新潟市上大川前通七番町1169番 tel 025-227-7111 fax 025-227-7117
E-mail somu@nuis.ac.jp URL http://www.nuis.ac.jp/

平成十五年度卒業生の皆さん
ご卒業おめでとう

本学での四年間を糧に新しい未来へ羽ばたけ。

平成十六年三月二十三日（火）午後一時より、新潟市民芸術文化会館において平成十五年度卒業式が、晴れやかに、厳かに執り行われました。情報文化学科一一八名、情報システム学科一九三名の計三一一名が、この春、本学から社会へと巣立ちます。

式典にはご父母も多数列席。学位記授与では卒業生全員の氏名が呼び上げられ、各学科総代が学位記を受け取りました。武藤学長の告辞、ご来賓の方々の祝辞、学生表彰と続き、情報文化学科の松田渚さんが卒業生代表として答辞を述べ、最後に校歌を合唱し、閉式となりました。

午後六時からはホテル新潟で学生主催の卒業記念祝賀会が開かれ、希望に満ちた新たな門出をにぎやかに祝いました。

学長告辞

新潟国際情報大学長
武藤輝一

新潟国際情報大学、情報文化学部、情報文化学科、情報システム学科の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとう。

本日、多数のご来賓並びにご父母の方々にもご出席頂き、第七回新潟国際情報大学卒業式を挙行できますことは、卒業生の皆さんはもとより、本学にとりましても誠に喜ばしい限りであります。この日を迎えられた卒業生の皆さんに、またご父母の皆様に新潟国際情報大学の役員、教職員を代表して、心からお祝い申し上げます。また、本日ご出席のご父母の皆様には、晴れの卒業式でご子弟を目の前にされ、お喜びは如何ばかりかとご推察申し上げております。

この度の本学の卒業生は、情報文化学科一一八名、情報システム学科一九三名、合わせて三一一名であります。このように希望と期待に溢れ、前途有為の皆さんを送り出すことが出来ますのは新潟国際情報大学にとりましても大きな誇りであります。

卒業生の皆さんが、これから四年間と思った長い筈の年月も、あっという間に過ぎ去ってしまったのではないでしょうか。皆さんそれぞれに沢山の思い出があり、数々の思い出は回り灯籠の絵のように、皆さんの脳裡に浮かんでくることでしょう。懐かしさは尽きぬことでしょう。そして、いよいよ実社会へと船出することになりました。新しい人生に踏み出す喜びのほかに、一抹の不安があるかもしれません。これからの社会では嬉しいことも多いでしょうが、悲しいことや淋しく感じることもあるでしょう。しかし皆さんは若いのです。強い信念と覚悟を持って、何事にも怯まず、恐れず、努力して自らの素晴らしい人生を作り上げて下さい。

ご存知のように、本学は昨年開学十周年を迎え、幾つかの記念すべき事業を持つことが出来ました。一方、大学の外を見ますと、私立大学、特に地方の私立大学をめぐる環境は徐々に厳しさを増しつつあります。好むと好まざるとに拘わらず本学もその波を乗り越えなければなりません。卒業生の皆さんが、卒業して本当によかったと思い、誇りに思うことが出来る大学であるべく、教職員の皆さん、在校生の皆さんともども、本学発展のため努力しなければと思っておりますが、卒業生の皆さんからも、これからの貴重な経験を通して、本学並びに後輩諸君のため、積極的に助言を頂きたいと思っております。同窓会にも是非ご出席下さい。新しい新潟中央キャンパスには同窓会室が出来ました。遠慮なくご使用下さい。

二十一世紀に入り情報技術は勿論のこと、生物細胞技術、超微細技術及びこれらに関連する分野でのグローバルな進歩には目覚ましいものがあります。他の分野でも変化は急速であります。そして、二十一世紀は「知識と教育の時代」とも言われています。時の流れに取り残され、自らの在る場所を失うことのないよう、生涯を通じての学習を心がけて下さい。皆さんの本学における学習や研究は、生涯学習の中で最も重要な、最も基本的な、最も時間とエネルギーを要したものとなるかもしれませんが、自らの生涯学習の課程であったと思って下さい。

皆さんの多くはこれから社会人として、組織の中で暮らすわけですが、この機会に二、三お話ししておきたいと思います。

第一は、日記帳でも、毎日身につけている手帳でもよいのですが、気についた事、大変よいと思った事、大変悪いと思った事などを記録しておく事をお奨めします。そして、これからの人生の中で、時には立ち止まり、経過した道を振り返り、この途中で書き留めた記録も参考とし、反省し、その後の自己の改革、発展に役立たせることが出来ます。

第二は、自らの強みを知る事です。自分で知っている積もりでも、違っている場合も少なくありません。寧ろよく知っているのは弱みの方かもしれません。大学での学業成果やそこまでの仕事や研究での経過を振り返り、時には他人の意見も聞き、自らの強みを知り、その強みを仕事や研究の上で生かして下さい。

第三は、自らの仕事や課題の中で、何が集中して行うべき事か考えるのは大切な事です。同時に二つの仕事を手がけ、"二兎を追う者は一兎をも得ず"の結果となる事もあります。勿論、三つの仕事を抱えて一度に優れた結果を得られる人も稀にはあります。樂聖モーツァルトは幾つかの編曲を同時に進める事が出来たそうで、聖徳太子にも仕事上では同じ能力があったようですが、このような人達は例外に近いのではないでしょうか。バッハ、ヘンデル、ハイドン、ベルディは多作であっても、一度に一曲だけ作り、一曲を作り終えてから、あるいは一時脇に置いてから新しい曲に取り掛かったそうです。

ところで、二十世紀後半での東西冷戦は二十世紀の内に終えましたが、予想されていた如く、二十一世紀になりましても、地球上では絶え間なく紛争が起きています。サミュエル・ハンチントンの言う「文化の衝突」が総ての紛争の原因とは言えないでしょうが、二つの異なる集団がお互いの立場に理解を示し、互譲の精神を持って、話し合い、行動しなければ、いつまでも根本的な紛争の解決は得られないことでしょう。幸い私達は先達の努力によって得られた平和なこの国に住んでいます。住み慣れますと平素は気づくことが少ないでしょうが、心の片隅には平和の国に住めることへの感謝の念を持ちつつ、社会への貢献に務めてほしいと思います。

今年の元旦は、新潟市内は雪もなく晴天で、嬉しいことでしたが、矢張り小寒から大寒にかけて、雪も積もり、吹雪に見舞われました。そしてようやく今、喜びの春を迎えています。梅の花から桜の花へと移り変わり、本学の校庭の桜が咲き誇る頃には、皆さんはもう新しい社会人として、沢山の抱負と夢を持ち、溌剌と活躍していることでしょう。中国の韓愈の言葉に「鶴れいは天生ならず、変化するは琢ほうにあり。」とあります。「立派な鶴の羽も天が与えたものではなく、日頃から自分の嘴で整えて形作ったものである。」と言うことを意味しています。皆さんが求めて努力し、自ら考え、行動し、それぞれに悔いることのない豊かな人生を作り上げますよう祈念致しております。

最後に、皆さんのご卒業を心からお祝い申し上げると共に、皆さんの前途に幸多かれと祈り、皆さんを送る詞と致します。

平成十六年三月二十三日

新潟国際情報大学長　武藤輝一

理事長祝辞

学校法人 新潟平成学院 理事長
小澤辰男

本日、卒業を許可された情報文化学科一一八名、情報システム学科一九三名、計三一一名の諸君卒業おめでとう。

本日ここに第七回、平成十五年度卒業式が挙行されるにあたり心からお祝い申し上げます。また、ご列席のご父母の皆様、教職員の皆様、本当におめでとうございます。

さらには、理事、評議員の皆様、卒業生をご採用いただいている企業の代表者の皆様、本学のOB教員、同窓会役員の皆様、大変お忙しいなか、ご臨席を頂き、誠に有難うございます。

振り返りますと、今から十四年前「環日本海時代をリードする新潟の地に、ロシア・中国・韓国の言葉や文化が学べる大学を作ろう」、「益々進む情報化の新しい時代に、コンピュータネットワークをはじめとする情報活用法を学べる大学をつくろう」「そして文系・理系といった枠を外し、トータルで学ぶことで国際化・情報化に対応できる若者を育てよう」。そんな構想のもと、新潟県、新潟市はじめ多くの方々のご支援をいただき、平成六年に本学が開学いたしました。そして六年後の平成十二年四月に諸君が入学し、本日卒業の日を迎えた訳であります。

この四年間、諸君は情熱あふれる、優秀で個性豊かな教授陣と恵まれた教育環境のなかで、刺激的ななかにも充実した学生生活を送られたことと思います。そしてあらゆる事象に対応できる能力を培ってきました。大学という村はこれで卒業ですが、今後は、さらに大きな人生の海原でより充実した日々を送っていただきたいと念願します。

これから諸君が生きていかれる社会は決して甘いものではありません。むしろ戦後最も厳しい経済環境の中での船出になるかも知れません。就職指導の先生方はじめ、全教職員のご活躍により、幸いにも本学の就職内定率は、全国的に見ても高い水準にあります。しかしながら日本経済の不況により、景気の低迷が続き、今後の明るい材料はなかなか見当たりません。しかしこれが現実です。どうか諸君が今日まで学び、培った力を遺憾無く発揮し、ひるむことなく己の道に邁進されんことを切に念願するものです。中国のことわざに「去る日の多くを苦しまず、只求めよ失う日の少ないことを」というのがあります。「ああ、今日も一日が終わってしまった」「今年も一年が終わった」といって、時の流れの早いことを悲しんだり、嘆いたりしないで、失う日、つまり後悔する日ができるだけ少ないよう努力し、充実した日を送れるよう頑張りなさい。という意味です。

そしてもう一つ、諸君には「若さ」という何物にも代え難い財産が有ります。失敗を恐れぬ若さ、未来を創造する若いエネルギー、諸君に与えられた最高の宝ものです。実社会で働くうえで、存分に発揮して下さい。それが諸君の足跡となり、後に大勢の新潟国際情報大学の後輩が続き、歴史、伝統を重ねることとなるのです。

本学は昨年の六月に開学十年を迎えることができました。大学設立に向けてご支援いただいた多くの方々、及びこの十年を支えていただいた方々に心から感謝と御礼を申し上げます。

またこの十年を機に、新たに新潟市の市街地に新潟中央キャンパスを設置いたしました。大学の授業は勿論のこと、地域に開かれた大学としての役割を果たすべく、公開講座や生涯教育を一層充実させるよう、全力で取り組んで参ります。

キャンパスの二階と、外の公園には、佐渡の彫金家で、四月より東京藝術大学副学長になられる、宮田亮平先生によるイルカの大作が設けられ、学生が大海原に飛躍し、目標に向かって前進する姿がイメージされた作品となっております。これは十周年にあたり、父母会から寄贈されたものであります。二階には同窓会室も設けられており、卒業後も皆さんが交流の場として、大いに活用していただきたいと願っております。

ご参列のご父母、ご来賓の皆様も是非共ご利用下さい。そして何なりとご意見、ご要望をお寄せいただきたいと存じます。

十八歳人口の激減や国立大学の独立法人化等により、私立大学の経営も益々厳しくなりますが、今後も学校法人として、教育現場でご活躍いただく先生方と共に、改革、研鑽を重ね、特色ある大学づくりを目指して精進して参ります。

開学十年の記念すべき良き日に卒業される、若い諸君の新たな門出にあたり、さらなるご活躍を祈念申し上げ、お祝いの挨拶といたします。

平成十六年三月二十三日

学校法人　新潟平成学院理事長　小澤辰男

来賓祝辞

新潟商工会議所会頭
上原　明

本日は、新潟国際情報大学第七回卒業式にお招きいただいたうえ、祝辞を申し述べる機会を与えていただきましたことは、誠に光栄に存じ、心からお祝いを申し上げます。

ご案内のとおり、新潟国際情報大学は小沢理事長さん・武藤学長さんをはじめ、関係各位の不断のご熱意とご努力により平成六年四月の開校以来、着実な発展を遂げられ、このたび、平成十五年度の卒業生を世に送り出すに至りましたことは、誠にご同慶にたえません。

申すまでもなく、新潟国際情報大学は情報社会を先導し、国際社会と情報社会をリードする人材育成を目指して開学以来、多くの有能な人材を県内はもとより全国各地に送り出し、わが国の産業・経済の振興発展に大きく貢献をされておりますことは、私ども新潟の経済界にとりましても誠に心強く、感謝申し上げる次第であります。

また、昨年は創立十周年記念事業として上大川前通七番町の中心市街地に新潟中央キャンパスを開校されたのをはじめ、国際交流センターを開設し、国際化、情報化に応える教育、研究をすすめるとともに市民が利用できるパソコンコーナーやライブラリーを設置するなど地域社会から親しまれる大学を目指す試みに対しまして心から敬意を表する次第であります。

さて、昨今の経済情勢は景気に明るさが見えはじめたといわれておりますが、わが国経済を支えている中小企業、とりわけ、地方の地域経済は大変、厳しい状況にあります。景気の本格的な回復が強く望まれるところであります。

このような時こそ、卒業生の皆さんは若者らしく燃えるような意欲とゆるぎない向上心で将来を切り拓き、各界の要請に即応できる立派な人材として大いに活躍されんことを期待するものであります。

これから皆さんは、新しい門出に大きな夢と希望を抱いて、実社会への第一歩を力強く踏み出していただきたいと存じます。

「企業は人なり」と申しますが、めまぐるしく変化する経済社会環境の中にありまして、企業の将来を担う人材づくりが、企業にとってもこれからの大きな課題であり、今求められているのは、何事にも積極果敢に挑戦する、活力と意欲のある人材であります。

最後になりましたが、卒業生の皆さん、大学で学んだことを十二分に生かしながら、より一層ご活躍されますようご期待申し上げますとともに、新潟国際情報大学の今後ますますのご発展と各位のご健勝を祈念いたしまして、一言お祝いの言葉といたします。

本日は誠におめでとうございます。

平成十六年三月二十三日
新潟商工会議所会頭　上原　明

卒業生答辞

情報文化学科
松田　渚

本日は私達卒業生のために、このような盛大な卒業式を挙げていただき、誠にありがとうございました。心よりお礼申し上げます。本日私を含め三一一人が卒業することとなりました。

入学式が昨日のように思えるとはよく言いますが、逆に四年間の大学生活を振り返ると、曖昧な記憶を辿ることとなり、そこに四年間という長い時間が確実にあったことを実感するばかりです。

私が大学生活を過ごした四年間は、小泉首相の朝鮮民主主義人民共和国訪問、ワールドカップ、9・11、アメリカ・イギリス軍によるアフガニスタンへの攻撃、イラク戦争、それに伴うイラクへの自衛隊派遣、憲法や教育基本法の改定への動き、多発するテロなど、世界に目を向ける機会がとても多くありました。そして、ジェンダー、南北問題、グローバリゼーション、ナショナリズム、地域紛争など多くのことを授業から学びました。

それにより、私の中には現代社会に対する違和感や疑問が生まれました。大学四年間で成長できたといえる点があるならば、様々な問題を自分の問題と捉え、現代日本に生きる私達が、世界のヒエラルキーのほぼトップに立って世界と関わっているということを認識するようになった点です。

日々の生活の繰り返しで、私達は現代社会の構造を内面化してしまい、その結果、問題意識さえも奪われてしまっているのかもしれません。だからこそ、日常の中で「少しおかしいな」と感じたことや腑に落ちなかったことを大切にし、自分の頭で考え、実践することが重要なのだと思います。思想とは実践し、実現することで意味を持つということも四年間で学んだ重要なことです。

私は大学生活でフェミニズムという思想に出会い、多くの示唆を与えてもらいました。フェミニズムには、「個人的なことは政治的である」という有名なスローガンがあります。この言葉は、日常の積み重ねが政治的な意味を持つが、日常生活に密着していることほど問題化しづらい、ということを教えてくれます。無論、大学は学問の場であり、公的空間です。しかし、多くの仲間たちと二日の大半を過ごしたその場所は、個人的ないし親密な領域を併せ持っており、その両方が交差する、重要な空間でした。そこで私達は、教えていただくことに耳を傾けるだけでなく、自ら語る言葉、あるいは語る場所を十分に持っていたのでしょうか。そう考えると、反省すべき点、また、考え込んでしまう点も多々あるように思います。

二十一世紀に入り、新潟国際情報大学も昨年創立十周年を迎えました。今後、批判精神・クリエイティビティ・イマジネーションを持った学生が輩出されること、また、大学という領域に集まる者が、自由に語り合い、互いの言葉に耳を傾けあい、一方的な力関係の場にはならないことが、本学の更なる発展につながると信じ、祈ってやみません。

そして、最後になりましたが、学問の楽しさと大切さを教えていただいた教職員の方々、大学生活を支えてくれた両親、楽しく刺激的な毎日を一緒に過ごしてくれたかけがえのない多くの仲間に感謝をして、私の答辞とさせていただきます。

二〇〇四年三月二十三日
新潟国際情報大学　第七回　卒業生代表
情報文化学部　情報文化学科　松田　渚

祝電

◆新潟県知事　平山征夫
◆新潟市長　篠田昭
◆大韓民国　慶熙大学校国際教育院　院長　金重燮（キム・ジョンスプ）
◆日本私立大学協会　会長　大沼淳
◆長岡技術科学大学　学長　小島陽
◆上越教育大学　学長　渡邉隆
◆長岡大学　学長　中西貞夫
◆長岡造形大学　学長　豊口協
◆新潟工科大学　学長　丹野頼元
◆新潟青陵大学　学長　木下安子
◆新潟綜合警備保障㈱
◆㈱フォーラムエンジニアリング
◆㈱リオン・ドールコーポレーション

以上、祝電をいただき、誠にありがとうございました。

平成十五年度卒業表彰

●学長賞（学業成績優秀）

情報文化学科（総代）　松田　渚
情報システム学科（総代）　小宮　修

●学術賞

情報システム学科　佐藤徳子
情報処理学会の研究会において「小出郷の電子自治体への取組み（構想）」というテーマで研究発表を行い高い評価を得た。

情報システム学科　吉井元大
ソフトウェア開発技術者試験・インターネット検定ダブルスター試験（Ⅰ種）・基本情報処理技術者試験・初級システムアドミニストレータ試験（Ⅱ種）に合格した。

●課外活動賞

情報システム学科　岡　香織
バドミントン部に所属し、三年次にダブルスで全国大会出場。また団体戦でも中心選手として活躍し、平成十五年度春季北信越大会団体優勝に大きく貢献した。

情報システム学科　熊田智宏
軟式野球部キャプテンとして平成十五年第二十四、二十六回の全日本大学軟式野球選手権大会、平成十五年第二十二、二十四回の東日本大学軟式野球選手権大会キャッチャーとして活躍した。

情報文化学科　山之内　浩
陸上競技部に所属し、北信越大会リレー種目で上位入賞多数。また今年度第八十七回日本陸上競技選手権リレー大会に出場した。

●国際交流賞

情報文化学科　矢﨑まゆみ
W杯ボランティア代表としても活躍し、また「日韓学生交流派遣団」の一員として参加した。新潟市内で日本語教育ボランティア活動も行った。

●地域交流賞

情報システム学科　多賀祥治
「新潟・金属加工市」情報システム開発の中心的存在として、ネットワークの構築、ソフトウェアづくりで活躍した。その成果は、新潟市主催の「新潟ビジネスメッセ」へも出展され、またマスコミでも取り上げられ、本学のPRにも貢献した。

卒業生のことば

情報文化学科　岡田篤志

大学生としての四年間がすでに終わろうとしています。入学したときの光景は、今でも鮮明に記憶しています。それがもう四年も前のことだと考えると、光陰が矢の如く突き進むことをあらためて実感します。

その四年間の中でもっとも力を注いだものは何かと聞かれたとき、私はサークル活動だと答えることができます。私はESS（英会話）に所属していました。私たちのESSは他の大学との交流が盛んで、北信越地域にある大学のESSと年に数回スピーチコンテスト等の大会を開催していました。中でも十二月に行われるドラマコンテスト（英語劇）は、私にとって非常に印象深いものとなりました。どのような劇にするかをみんなで話し合いつつ、創りあげた話を私が台詞に起こすということをしてきました。その他にも、サークルでは数々の経験をしてきました。サークルや私自身を支えてくれた方々には本当に感謝しています。これまで学業だけでなく、数々の場面で支えていただきました先生方、同じサークルで活動してきた学生、四年間本当にお世話になりました。

最後になりますが、冒頭で私は時の流れの速さに言及しました。確かに四年間が流れるのは早いですが、期間としては長い期間です。何かをするには十分な期間があります。在学生がこれを読んで自分のためになる何かを見つける一助になれば幸いに思います。

情報文化学科　竹内瑠美

卒業を迎えるにあたり、一番の感想は四年間が本当にあっという間に過ぎたということです。この四年間を思い出すと、楽しいこともあれば辛ったこともたくさんありました。しかし、今思えばその経験があったからこそ現在の自分が在るようにも思えます。三年次に友人達と立ち上げたサークル活動では、世代を問わず多くの人達と交流を持つことができました。そこからたくさんの刺激を受け、自分自身も大きく成長することができました。大学で得た友人達は私の一生の財産であり、進んでいく道は違えどこれからも共に成長し続けていきたい大切な仲間です。四年生になると卒業論文、就職活動と多忙を極め、思い悩むことも多々ありました。特に就職活動では、この就職難の時代に簡単に就職先は見つからず、自分の不甲斐なさを痛感させられました。しかし、ゼミ教員の小林先生を始めとした諸先生方のご支援もあり、何とか自分の希望職に就くことができました。思い悩んだ分だけその喜びは大きく、これもひとえに諸先生方のお力添えのお陰だと感謝しています。私にとってこの新潟国際情報大学での四年間は人生においてとても大きなものであり、これから社会に出るにあたって大きな糧となっていくでしょう。最後に大学まで出してくれた両親に感謝し、社会に出てからも目的意識をはっきりと持ち邁進していきたいと思っています。

情報文化学科　立川大輔

四年間の学生生活はとても他人に自慢できるものではありませんが、最後の一年間は、自分自身に誇れるものであったと感じています。私は四年生の初めに、「アムネスティnuis」という学生NGOを設立しました。身近な人権問題について学生レベルから考え、提案、啓発を行おうとする団体です。（http://www.geocities.jp/amnesty_nuis/）

さて、いざ作ってみたものの、最初は人脈もお金も情報も、何もありません。全くのゼロからのスタートです。NGOといっても、活動するにはお金が必要です。あるのは「身近な人権について考える」というコンセプトだけでした。いかにして基盤を築くか。私がやったのは、とにかく動くことでした。例えば、「新潟国際情報大学でNGOを作りました！」というメールを大量に送信したり、他のNGOの集会に参加して認知していただいたり、ビラをまいたりと、「やっても無駄だ」とはじめから諦めそうなことを逆に進んでやりました。結果的に何とか基盤を整えることができましたが、まさにこの活動を通じて、多くの人と出会い、話をする機会に恵まれました。

卒業後は、「とにかく行動する」時間がなくなります。そのため、学生時代に得た友人や社会人との人脈は貴重な財産になるでしょう。これこそ「アムネスティnuis」が与えてくれたものです。少しの好奇心が思わぬ結果をもたらしてくれること、これを実感しました。最後に「アムネスティnuis」設立ならびに運営にあたって、先生方、「アムネスティ新潟」の方々にご助力を頂いたこと、そしてメンバーの一人一人に心から感謝します。

情報文化学科　渡邉由香

四年間の大学生活を振り返ってみると、様々な事を経験することができ、とても有意義なものであったと感じています。その中でも、派遣留学制度でアメリカに行ったことが、一番思い出に残っています。英語のみで進められる授業、ルームメイトとの生活、ホームヴィジットなど、経験することすべてが初めてで、毎日がとても新鮮でした。何よりも、自分が日本人であること、外国人であることをこんなに意識したのは初めてでした。

また、私はアメリカでたくさんの人と出会いました。先生方を始め、世界中の国々からの留学生、ホストファミリーの皆さんなど、いつも親切に接してくれた人たちにとても感謝しています。そして、文化や習慣の違う人たちと話し、コミュニケーションをとることで、多くの刺激を受けました。

私はこの留学で、様々な経験をし、いろんな国の人たちと出会うことで、自分の視野を広げ、世界を身近に感じることができるようになったと思います。また、アメリカの文化や歴史に触れるにつれて、「日本は？」というように、逆に日本の文化について興味を持つようになったのも事実です。一ヶ月という短い期間でしたが、一生忘れられない経験となりました。

四月からは社会人一年生、これからもっといろんな経験をすると思います。大学生活四年間で経験したことを糧に立派な社会人になりたいです。

情報システム学科　大熊恭平

大学生活も終わりに近づいています。四年間の大学生活を思い出すと物凄く充実した毎日でした。履修する科目が多くて朝から晩まで大学に通った日々や、定期試験の難しさに苦しんだ時もありました。

そんな中で一番の思い出は何と言ってもカナダへの短期留学です。最初は環境に馴染めず苦痛だなと感じるときもありました。しかし見るもの聞くもの全部が新鮮で、いつの間にかカナダの生活を楽しんでいる自分がいました。不思議な事に、カナダの文化を知ろうとすればするほど日本の文化を知りたくなりました。今までと全く違う環境に身を置いた五週間は価値観を変える程の体験になりました。短い期間でしたが留学出来た事が本当に良かったです。ほんの少しですが逆境にも強くなりました。

最後に、四年間で多くの先生方と友達に出会えて本当に良かったです。衝突することもいっぱいあって傷付ける事も傷付く事もありました。辛い時もあったけどそれ以上に楽しい事が多くありました。その全てが大切な思い出で、自分を成長させるきっかけになりました。

そして何よりも自分をここまで導いてくれた家族、特に両親には心の底から感謝しています。本当にありがとうございました。

情報システム学科　岡　香織

大学生活を振り返ってみると、この四年間はすごく短かったように感じられます。「アレをしておけばよかった…。コレもしたかった…。」などと後悔している面もあります。けれど今となっては大学生活のすべての出来事がいい思い出となっています。

大学とは学業に励むところですが、人間関係を大切にすることもとても大切だと思いました。私にとって大切なものとなったのは、厳しい練習を共に頑張った部活の先輩や後輩、そしてなによりも四年間ずっと一緒に居てくれた親友です。授業のことも、私生活のことも何でも話すことが出来ました。また、部活の仲間や親友以外にも、ゼミの先生やメンバーにも恵まれ、ゼミ旅行、紅翔祭、卒業論文など辛い事もあったけれどみんなで協力し合い、とても楽しく仲が良く、嬉しい気持ちで毎日を送ってくることが出来たと思います。私は大学で出会えたみんなに感謝しています。みんなに出会えてよかった。

これから社会に出ると今と全く環境が変わり、辛い事やどうにもできない事などたくさんの事に行き詰まってしまうと思います。そのような時は大学で学んだたくさんのことや、一緒に頑張った仲間たちのことを心に置き、精一杯頑張りながら、社会人としてこれからも大きく成長していきたいと思います。

今までお世話になった先生方、どうもありがとうございました。

情報システム学科　加藤　直

新潟国際情報大学の第七期生として入学してから早四年。私たちも卒業を迎えました。学生時代、陸上がいつも生活の中心にあった私からすると、まさに走り去るような四年間でした。大学生として勉強することは当然として、それ以外に今しかできないことをすることが大学生活には重要であり、それが卒業した後の生活にも活きてくると思います。

百分の一秒でも速く、一センチでも遠くにと、陸上は自分の身体を極限まで使うスポーツであり、身体が自分の思い通りに動く学生時代が最も競技生活が充実する時期です。逆にいえば、今しかできないことだと思います。私も大学時代の競技生活は充実し、様々な大会で良い成績を残すことができました。

今の時代、体育会系というものは、流行らないかもしれません。特に陸上は走っているだけで何が面白いのか分からないとよく言われますし、私も陸上をしていなかったらそう思うでしょう。しかし、百分の一秒を縮めるために汗を流し、その努力が結果に表れた時、充実感と次への気持ちが生れます。また、陸上を通し、先輩、後輩と普通の学生生活の中ではなかなか得ることのできない人間関係を築くこともできました。

学生生活を終え、私たち卒業生にとってこの四年間は今しかできなかったことが出来た四年間であったのではないでしょうか。

情報システム学科　田中桂子

「もう卒業か…」大学生活というものは本当に短い四年間でした。四年間で得た思い出の数々は、良い思い出ばかりです。もちろん楽しい思い出ばかりではありません、苦しい思い出もありました。しかし、振り返ればどれも良い思い出です。

この四年間で、学んだことの多くは今後の社会生活において大いに役立つことでしょう。自ら選択し、履修した講義内容の多くは学生生活で必要とされるというものよりは卒業してから役立つものだったということに卒業を目前とした今痛感しています。

様々なことを経験してきた四年間の中で、一つ後悔している事があります。それは『もっと旅行をしておけば良かったなぁ』ということです。大学生活ほど自由に長期間かけて旅行などを行える『時間』というものが与えられる時期は他にないと思います。貴重な時間を逃してしまった事に後悔しています。自分が生活している生活範囲だけでなく外に目を向けることはただ単に視覚だけの視野が広がるだけでなく、自分自身の価値が増えると思うからです。これからは社会に出て、今まで以上に時間というものが貴重になってきます。『後悔した』という結果にならないよう、自分のために時間を大切にしたいです。

最後に、大学生活を通して出会い、支えてくれた友人や教職員の皆様に感謝の気持ちを込めて『四年間お世話になりました。多くのステキな思い出をありがとうございました。』

◆◆卒業生に贈ることば◆◆

情報文化学科教授　原口武彦

ご卒業おめでとう。この四年間の大学生活を通じて、何を得ることができただろうか。学業のこともさることながら、あなたが学業と同じくらい精を出したアルバイトについて私は考えてみたい。

大学を卒業して社会に出るということは、当然ながら、大学時代のアルバイトがアルバイトではなく本業になるということだ。アルバイトが大学に籍を置きながらの「かよい」の仕事だとしたら、これからあなたは実社会で「住み込み」で生活することになる。そして、在学中のアルバイトでは実感できなかった「住み込み」のつらさを実感し、大学生活を懐かしむことになるだろう。

大学時代のアルバイトは、その仕事がどれほど単調なものであっても、あまり苦痛を感じなかったのに、今やその仕事が本業になるとそうはいかない。大学時代にあれだけアルバイトに精を出すことができたのは、本来自分は大学生であり、アルバイトに精を出す自分は、仮の姿であるという精神的ゆとりがあったからであろう。しかし、割の良い深夜作業のアルバイトに疲れて、午前中の授業から心地よく居眠りできる教室は、卒業後のあなたにはもはや存在しないことになる。

実社会に「住み込み」で突入していく際、あなたの心の片端に「大学」をしのばせて持っていってもらいたいと私は願う。大学時代のアルバイトを通じて培ったアルバイト感覚、自分の仕事をつきはなして眺めることができる感覚を可能なかぎり持ち続けてもらいたい。本業の仕事で困難に出くわすこともあるだろう。そんなとき、あなたの心の中にしのばせてきた「大学」の視点に立って自分の立場を眺めてみること、そうした心のゆとりを持つことはとても大切なような気がする。

そして、あなたの心の中の「大学」がしぼみそうになったら、いつでもキャンパスに遊びに来てもらいたい。空と風と光があなたを待っています。

情報システム学科教授　竹並輝之

卒業おめでとうございます。

卒業というと、訓練を終えて大海原に漕ぎ出す船出や、若鳥の巣立ちが思い浮かびます。自分の判断で自由に行くべき方向を決め、希望を胸に地道に漕ぎ続け、飛びつづけると、その先には新大陸や、豊富な餌場がみえてくるでしょう。

皆さんは、大学で四年間の専門教育を受けてきました。ただ、専門教育といっても社会で通用するレベルから言うと、ほんの入門です。例えば、一年間二コマのプログラム演習を受けると八十時間ほどの勉強をしたことになりますが、会社でプログラマとして仕事をすれば十日もすればその位の量はこなしてしまいます。要は、社会に出てからの勉強と努力が、その人の力となり評価となるのです。

それでは、大学での学生生活は何だったのでしょうか。大学での勉強を通して、専門分野の基礎的考え方を学んだと同時に、卒業論文の作成や、教員、友人との接触を通して、新しい課題にチャレンジする勇気、経験のない問題を解決する方法、継続的に勉学を続ける姿勢、広い視野と柔軟性のある思考力、仲間とのコミュニケーション力などを身につけたことでしょう。それに加え、生涯の財産となる良い友人を得たことと思います。これらは、これから長い社会生活を営む上で、何にも増して重要なものだと思います。

私は毎年、「一球入魂」という言葉を卒業生に贈っています。これは野球やテニスなどの球技で使う言葉ですが、自分の決めたことに、その瞬間、瞬間に魂を込めて打ち込めという意味です。仕事だけでなく、スポーツ、恋愛など何にでも当てはまります。心に留めておいてください。

新潟国際情報大学を卒業したことを誇りに、一歩一歩前進されることを期待しています。

退職者からの一言

塚田真一
情報システム学科助教授
（在職期間:1998年4月～2004年3月）

＊思い出

5年間の思い出で印象深いのは、カナダ海外研修です。行く前は、学生の引率ということで少し緊張しましたが、カナダでの生活は楽しい毎日でした。帰国途中のシアトル空港において寮生活で使っていたナイフをそのまま持ち込み、捕まってしまったことも今となっては良い思い出です。また、4期生や5期生達と昼食・夕食を食べたり、温泉やドライブなどに行ったりしたことも良い思い出です。5期生はゼミ生全体がまとまっており、卒業後にもみんなで集まってドライブに行ったりしました。ゼミ生以外の学生達とも遊んだり、ご飯を食べたり学生達との思い出がいっぱいです。

＊学生に向けて

大学での4年間は学生生活最後の貴重な時間ですので、有意義に時間を過ごして下さい。社会人にならないと本当はよく分からないと思いますが、時間の面で自由がきき、自分のしたいことができる貴重な時間です。良い思い出をいっぱい作れるよう積極的に行動し有意義に過ごしてください。

＊これからの予定

4月からは東京都日野市にある明星（メイセイ）大学において数学・統計学関係の授業を担当します。来年度前期まではシステム数学・多変量解析を担当しますので、どうぞよろしく。

松井孝雄
情報システム学科助教授
（在職期間:1994年4月～2004年3月）

＊思い出

大学院生のときにお話をいただき、開学と同時に初めての勤務先として赴任してから10年(準備期間も入れればさらにもう数年)の間この大学の一員としてすごしてきました。長い期間ですから思い出もたくさんありますが、特に印象深いのは開学から数年間の学習指導委員および情報センター運営委員としての仕事です。学習ガイドや情報センター利用ガイドの作成に始まり、ほとんど何もない状態からさまざまな決まりやシステムを作っていく作業に参加できたことは大学教員として貴重な体験だったと思います。また、学生・教職員の皆さまを含め、心理学専攻学生だった頃にはお会いすることのできなかったようなさまざまな方々との出会いもたいへん有意義でした。研究面では後悔も残りますが、得るところの多い10年間でした。皆さまに改めて感謝いたします。

＊これからの予定

4月からは愛知県にある中部大学の人文学部心理学科に勤務いたします。大学の規模も学科の専門もこれまでとはかなり違う環境になりますが、新潟国際情報大学での経験を生かして教育につとめるとともに、心理学研究者として改めて再出発するつもりでおります。

Nicola Hutton
（ニコラ・ハットン）
CEPインストラクター
（在職期間:2002年4月～2004年3月）

＊これからの予定

イギリスに帰国し、イギリスで教育関係の仕事につく予定です（編集部）。

樋口　至　学務課長（在職期間:1999年4月1日～2004年3月31日）

1999年に教務課長として着任し、2000年において大学入学者選抜大学入試センター試験の導入、2002年、2003年においては新潟大学、県内私立大学と本学間の単位互換に関する協定、編入学等の規程の整備に携わってまいりました。
退職後はのんびりと趣味の釣り三昧の生活を送る予定です。

全　美順（チョン ミスン）　2003年9月から2004年3月まで、慶熙大学から招聘講師として韓国語を教えられました。

二〇〇三年度 留学帰国報告会
派遣留学・海外夏期セミナーを終えて

国際交流委員長　區　建英

本学は平成十二年度から派遣留学・海外夏期セミナーの実施を始め、十四年度まで計一二七名の学生を海外に派遣した。十五年度も引き続きこの制度を実施し、多くの学生が留学に応募した。面接や選考を行った結果、計五十一名を派遣することに決めた。その中で、中国（北京師範大学）コースの留学を予定していた二十九名の参加学生は残念ながら、SARSの再発への懸念によって止むをえず派遣が中止された。中国コースを除いて、情報システム学科の海外夏期セミナーでは、カナダ・アルバータ大学に約五週間六人を派遣し、情報文化学科の派遣留学制度では、アメリカ・ノースウェスト・ミズーリ州立大学に約五週間十一人を、また韓国・慶熙大学に四人、ロシア・極東国立総合大学に一人を、それぞれ約四ヶ月派遣し、計二十二名の学生を送り出した。

四コースの参加学生はいずれも、留学先の国でよく勉強し活躍し、多くの成果を収めて無事に帰国した。平成十六年一月十四日、これらの留学参加学生は両学科に分けて、一年生に対し自分の留学体験を熱心に紹介した。韓国コースの女子学生は、民族衣装のチョゴリとチマで会場を彩り、そこへ、前年中国留学に参加した四年生も飛び込んで、流暢な中国語で語りながら通訳を行なった。また同日、留学諸国で活躍した学生諸君を暖かく迎え激励するために、学長をはじめ教職員一同は新設の国際交流センターで、ささやかなパーティを用意し、留学帰国報告会を行なった。

何れのコースの学生も留学の成果を非常に有意義なものと感じた。外国語がとても上達し、文化の異なる外国社会で多くの新しい発見を得、自分の人生を見直す機会も得た。現地の人々と直接交流する中で良い友人ができた。皆、国際感覚が養われたという感想を共有している。アメリカ・コースの富樫文さんは、ルームメートの黒人女子との交流やアメリカ的生活の体験で受けた感動を語る。韓国コースの土屋奈央さんは、韓国人教員のユニークな教育法によって勉強が促され、韓国人の中に入り外国人としての体験を味わってよかったと言う。ロシア・コースの錫村安章君はロシア人の友人も得たし、他の国の友人にも接触し多様な文化に触れることができ、予想以上の成果を得たと喜ぶ。また、堀井翔太君はカナダ・コースの学生を代表して、現地で英語とともに、北米社会への理解や情報学研究もできて、実りの多い研修になったと評価している。

▲国際交流センターにて

二〇〇三年度情報システム学科

卒業論文発表会
これから自分に自身がつきます!!

情報システム学科四年　坂井希代子

去る一月十日、二〇〇三年度情報システム学科卒業論文発表会が、本校キャンパスと新潟中央キャンパスの二会場で開催されました。

昨今、卒業論文を提出するだけでなく、発表を卒業条件にしている大学が増えてきました。しかし、卒業論文を必修でなく、選択科目にするというまったく逆の考えの大学も増えてきています。

そんな中、情報システム学科では、「それまでに修得した知識をもとに、問題発見・解決の能力を養うことを目指して、卒業研究を行う。情報システムの計画・開発等をめぐる問題をとらえ、検討を加える。そして、それに対する解決策を提案し、その効果について論ずる。」という目的のもと、情報文化学科とともに卒業論文を必修としています。

また同時に、自分の成果をプレゼンテーションする研究発表会も必修となっています。発表会では、各自持ち時間が十五分と決められており、その中で質疑応答も行われます。私が大学で学んできたことの何よりの集大成がこの卒業論文発表会にあると考えます。それだけプレゼンテーション能力が重要であり、また違った言い方をすれば、発表会は私の大学生活において一番精神的にきつく(笑)苦労したものだからです。ただ論文を提出して終わりなら、どこか気合の入らないものになってしまうかもしれません。しかし発表会をすることが前提なら大勢の人に聞かれるということで、みんな工夫を凝らし更に良いものになっていくと思います。

そして、この発表を通し、発表の時の話し方・パワーポイントの作成の仕方・論文の要約・質疑応答等、あげたらきりが無いほどのことを学ぶことができました。たくさん苦労がありましたが、これら全て社会に出たときの糧となります。中でも一番の糧となるのが、自信。です。きっと私だけでなく、多くの人が感じられただろう。達成感(解放感も含む?)。、その達成感が自信へとつながっていくのだと思います。

近年、プレゼンテーション能力は、ますます求められてきていますが、実際社会にでて、働き始めた今、とてもその重要さを実感しています。大勢の前での発表など機会はそうそうありませんが、先輩・上司に意見を求められることが多々あります。プレゼンテーション能力とは多少違うかもしれませんが、自分の意見をまとめてわかりやすく伝えなければいけない、というところは一緒です。なので、そのような能力を身につけることはとても重要で、学生の時に発表会を通して、それを学ぶ機会があったことはとても良かったと思います。

これからも大学で学んだことを十分に生かし、社会人としてがんばっていきたいと思います。

▲熱のこもった発表会

資格取得奨励金授与式

在学中にさまざまな資格試験に挑戦しようという学生たちを、NUISでは積極的にバックアップしています。資格取得や認定試験などの情報提供はもちろん、大学で指定した資格の取得者への奨励金制度を設けています。その授与式が、平成十五年一月十四日に行われました。

緊張している人もいれば、奨励金をもらってうれしそうな人もいて、反応はそれぞれ。

資格を取得できた皆さん、おめでとうございました!

今回表彰された資格とその取得者数です。

Ⅰ種	
TOEIC	一名
インターネット検定ダブルスター	一名
Ⅱ種	
中国語検定三級	十名
ハングル能力検定試験準二級	一名
初級システムアドミニストレータ	十五名
TOEIC	六名
基本情報技術者試験	三名
インターネット検定シングルスター	六名

国境を越えて～across the border～ チェンマイ大学の国際セミナーに参加して

情報文化学科三年　渡辺翔子

私は本学の英語プログラムのCEPの授業で一緒の薄聡史君（情報文化学科四年）、木村紘子さん（情報文化学科二年）と三人で、三月十五日～十九日までタイのチェンマイ大学主催の"The International Seminar for the Development of the Students. Cooperative Network in Education and Culture"に参加してきました。このセミナーには、日本、タイ、マレーシア、台湾、バングラデシュ、オーストラリア、ミャンマーから約六十人の学生や教師が集まり、講義やグループディスカッション、プレゼンテーションを通してそれぞれの国の文化や教育制度、互いの考えや経験などを交換し合いました。私はこのセミナーで言語教育の違いに愕然としました。セミナーは英語ですべて行われたのですが、まわりの英語のレベルの高さに圧倒されました。日本では、英語教育は現在少しずつ変わり始めているとはいえ、だいたいの人が中学校から本格的に英語を勉強しています。しかし、今回セミナーに参加した学生は幼稚園や小学生から英語を習い始めるそうです。中には、特定の科目を英語で勉強するという国もありました。日本では英語が話せれば十分であると思われますが、他の国の人にとって英語が話せるというのは当然のことであり、だいたいの人が三ケ国語以上話していました。日本は経済的には先進国ですが、この部分においては、世界からかなりの遅れをとっている、と強く感じました。グループディスカッションは、何ケ国語も飛び交うなんともいえない不思議な空間でした。

また、このセミナーの期間中、国ごとにパフォーマンスをしたのですが、私達三名は折鶴を配ったり、目の前で参加者の名前を漢字で書いてみせたり、日本の歌を歌ったり、浴衣のファッションショーをしました。予想以上に好評でした。

このセミナーを通して沢山の友人ができましたが、タイで過ごした最後の二日間はこのセミナーで知り合ったタイの友人の家にホームステイしました。二つの家族と生活を共にすることで、セミナーで感じたこととは違う側面から異文化理解を体験することができました。

セミナーで知り合った友人たちとは遠く離れてしまいましたが、今私たちにはEメールという手段があります。私たちはEメールを用いて、彼らと連絡を取り合っていかなければなりません。異なる国・文化圏の学生同士が相互に理解し、発展していくこと、それが、今回のセミナーの最大の目的なのです。英語というのは、ひとつのコミュニケーションツールとしてやはり必要で、バイリンガルが当たり前の環境の中で、多くの友人と共に過ごした一週間はいろいろなものを見て、様々なことを学べた、かけがえのない時間でした。

▲パフォーマンスでの記念撮影

国際交流フェアー

開催のお知らせ

本学学生はもとより広く市民の皆様に、本学の国際交流活動をご紹介するとともに、国際交流の輪を広げて行くために、学生が中心になって今年初めての企画として「国際交流フェアー」を下記のように開催いたします。国際交流と地域交流をつなぐ場にしたいと思っておりますので、学外の皆様も是非ご来校ください。

国際交流委員会

1. 本校キャンパス

*右の日程で、学生ロビーで昼休み（12時30分から）に各コース毎に学生が各国の文化等を演出いたします。

*4月19日から28日まで、国際交流センターにて提携先の国や大学を紹介する展示等をします。

4月19日（月）ロシア
20日（火）中国
21日（水）アメリカ
22日（木）韓国
23日（金）カナダ

2. 新潟中央キャンパス

4月30日から5月19日まで、1階ロビーにて提携先の国や大学を紹介する展示等をします。

二〇〇三年度　本学紀要出版案内

二〇〇四年三月、本学情報文化学部紀要第七号が出版されましたので、その目次をご紹介します。

◇ 人文科学編

ソウルの異邦人、その周辺　―李良枝「由」をめぐって―　申銀珠 助教授
韓国文化教育における文化項目選定と授業の事例　全美順 講師
李清源の政治活動と朝鮮史研究　広瀬貞三 教授

◇ 社会科学編

米国における防衛部門経済とマクロ経済成長　―Mueller and Atesoglu モデルの実証分析とその評価―　安藤潤 助教授
厳復の初期における伝統批判と改革思想　區建英 教授
資格取得教育に関する教材及び教授法について　河原和好 講師ほか
判例紹介　テロリストと人身保護請求の可否　―グアンタナモの被拘束者に関する五つの裁判例から―　熊谷卓 講師
階層線形モデルによる"地域不公平感"の分析　小宮山智志 講師
経済学の実践的教育を推進する上での株式売買シミュレーションの調査研究　塚田真一 助教授ほか
Gender and Mathematics Education: A Comparative Study of Japan and Scotland　ニコラ・ハットン CEPインストラクター

◇ 自然科学編

新潟国際情報大学学生の形態、体力、及び運動能力　―体格指数、皮下脂肪厚、及びバーベル挙上能力等について―　藤瀬武彦 教授ほか

平成15年度公認団体の主な活動成績

日付	団体名	大会名	開催場所	大会結果
9月 5日～ 7日	水泳部	日本学生選手権水泳競技大会	東京	
11月21日～23日	ESS	HESSA　ドラマコンテスト	上越市	
11月22日～23日	バスケットボール	第8回藤田修一杯争奪新潟県学生バスケットボール選手権大会	新潟市	ベスト4
11月22日	ESS	国際エアリゾート専門学校スピーチコンテスト	新潟市	
11月22日	陸上競技部	2004年度全国都道府県対抗男女駅伝競走大会新潟県最終選考会 兼2003年新潟県長距離記録会	新潟市	
11月23日	茶道部	学生茶会	新潟市	
12月 4日～ 6日	バドミントン	北信越学生バドミントン新人選手権大会	上越市	男子ダブルス　木村・川上ペア…ベスト4位 女子シングル　西須…3位 女子ダブルス　西須・村田ペア…ベスト3位
12月 7日	硬式テニス	ファイナルリーグトーナメント	新潟市	
12月14日	フィットネス研究会	第12回新潟県アームレスリング選手権大会	白根市	ライトハンド 75kg級 広木達也3位
1月 2日	吹奏楽部	FM新潟　正月イベント	新潟市	
1月11日	フィットネス研究会	新年　お年玉マッチ	仙台市	

卒業生の便り

人は何かを感じ、何かを考える…

NHK新潟放送局　長谷川慶子
（情報文化学科　平成十一年度卒）

私は、現在、NHK新潟放送局でテレビ・ラジオのキャスターやリポーターをしています。といっても、原稿を読んだり、番組を進行したりするだけではありません。県内の様々な話題・出来事を探し、取材をして、構成を練り、「放送」へとつなげていきます。仕事の八割～九割が放送に出るまでの準備です。（入局当時、キャスターの仕事は、テレビ画面から見えるものだけかと勘違いしていた私。苦労したのは言うまでもありません。）

現代、世の中に流れている時間の中には、同時にたくさんの情報も飛び交っています。私は、「情報」には“善い情報”“悪い情報”があると思っていました。はたして、自分が放送しようと考えている「情報」は善いものなのか、悪いものなのか…。放送に携わる度に不安を感じていました。

「自分はこの仕事に向いていないのではないか。」そんなことを考え始めていた頃、友人との会話であることに気付き、考えさせられました。

それは…。世界中で、テロや戦争、拉致問題などが騒がれていて、目や耳から入ってくる情報に振り回されていた私の目の前で、同じように頭を抱えていた友人の悩みは、実は「転職情報」だったのです。世界を動かす情報よりも、その人を取り巻く日常の生活の中の情報の方が重要で、必要とされているのだと気付いた瞬間でした。

数限りない情報の中には“善いもの”“悪いもの”なんて無いのかもしれない。「情報」を手に入れたとき、そこに何を感じ、そこから何を考えるかがとても重要なのではないかと思いました。私の今の仕事は、情報を発信する側です。自分の発信した情報に少しでも多くの方が何かを感じ、そこから何かを考えるきっかけになれば…。そう考えるようになり、今、自分の仕事にやりがいを感じています。

▲スタジオにて

就職活動レポート

長引く景気の低迷に、就職を取り巻く環境は決して良好とはいえません。そんな悪環境の中ですが、就職指導委員会は、万全の体制で学生の活動を支援してまいります。

《学内合同企業説明会》

毎年二月に開催する「学内合同企業説明会」。今年は二月十二日（木）十三日（金）の二日間にわたって本学体育館を会場に実施されました。学生たちは、自分の興味ある企業のコーナーに積極的に足を運び、真剣に情報収集を行っていました。

今年は比較的天候にも恵まれ、二日間で昨年同数の県内外企業一二八社の人事担当者が出席。会場は学生の熱気に包まれていました。

《就職体験講座》

四年次生の就職活動が本格的にスタートしました。その学生の支援の一環として、二月七日（土）・八日（日）の二日間、専門家による「就職体験講座（模擬面接）」を開催いたしました。この「就職体験講座」は現在の厳しい厳選採用に対して、自分自身を表現し採用試験に望むことができるようにと四年前から実施してきました。

一日目（午前）は「面接のポイント」をテーマに講演が催され、面接の種類や企業が求める人材、面接での自己P.Rのポイントなどをについて、学生の代表者二名による模擬面接を交えながら説明があり、午後からは実際に模擬面接を実施し、一人ひとりに効果的な面接についてのアドバイスがありました。

二日目のグループデスカッションでは、学生が採用担当になった前提で、求める人材像を設定し、それに基づいて誰を採用するかついて活発な議論が交わされました。これにより学生は採用する側の視点を知り採用されるポイントを理解しました。

受講する前の学生は不安そうな表情でしたが、面接を二回三回と繰り返しおこない他学生の面接を参考にしながら自分自身を表現するコツを掴むことができました。

平成16年度卒業生主な就職先一覧表

アークベルグループ	㈱キュービット	㈱総研システムズ	㈱原信
㈱IHS	協栄信用組合	㈱ソリマチ経営	㈱パワーズフジミ
アイエックス・ナレッジ㈱	共立観光㈱	㈱第一印刷所	萬代電業㈱
アイビー企画グループ	㈱共立メンテナンス	大起産業㈱	㈱ビーアイテック
㈱アビバグループ	グッドウィル・グループ㈱	㈱大成社	㈱BSNアイネット
アルファブライト㈱	ゲンキー㈱	㈱ダイナム	㈱ピーコック
㈱石黒農園	浩庸㈱	㈱高儀	㈱ビット・エイ
入や萬成証券㈱	㈱コダマ	燕市農業協同組合	㈱ひらせいホームセンター
㈱ゼネラルスタッフ	コニカミノルタNC㈱	鶴木㈱	㈱フォーラムエンジニアリング
イワツキ㈱	㈱コメリ	東光商事㈱	㈱フクエー
㈱ウイング	㈱コロナ	東西運輸㈱	㈱船栄
㈱ウオロク	㈱近藤組	東洋熱工業㈱	㈱富有社
㈱エスエフシー新潟	㈱コンピュータシステム	トヨタカローラ新潟㈱	㈱PLANT
越後中央農業協同組合	㈱サイゼリヤ	㈱ドラッグフジイ	防衛庁自衛隊
㈱江戸沢	サイバーコム㈱	長野刑務所	ホーク電子㈱
㈱エヌエヌ・コンピュータサービス	㈱サンカ	新潟医療生活協同組合 木戸病院	㈱ホンマ製作所
NSGグループ	三條信用組合	新潟運輸㈱	巻信用組合
㈱エヌ・ティ・エス	㈱サンソウシステムズ	新潟県警察本部	丸三証券㈱
エヌ・ユー情報サービス㈱	㈱シアンス	新潟県厚生農業協同組合連合会	丸惣運送㈱
㈱エム・アイ・ディジャパン	㈱シーズ・プランニング	㈱新潟ケンベイ	源川医科器械㈱
㈱エムテートリマツ	㈱ジェイティービーツアーズ	新潟証券㈱	㈲メディア・アナライザ
扇商事㈱	システムリサーチ㈱	新潟ゼロックス㈱	㈱ヤスマ
㈱オーシャンシステム	下田村役場	新潟綜合警備保障㈱	㈱ヤマダ電機
㈱オートバックスセブン	清水商事㈱	㈱新潟ダイハツモータース	山文大同青果㈱
オギ医理科商事㈱	社会福祉法人　にいがた寿会	新潟日野自動車㈱	ユニー㈱
小野塚印刷㈱	㈱ジャパンネット	新潟リコー㈱	㈱吉運堂
㈱カネコ商会	上越コンピュータサービス㈱	日産ディーゼル新潟販売㈱	㈱読売情報開発
金清木材㈱	新見工業㈱	日産部品新潟販売㈱	㈱リオン・ドールコーポレーション
かねもり㈱	㈱スズキ二輪	日産プリンス新潟販売㈱	㈱リンコーコーポレーション
加茂商工会議所	㈱スペースアルファーシステム	日本航空㈱	㈱ワット
㈱川崎製作所	晴光工業写真㈱新潟支店	日本生命保険（相）	
㈱カワチ薬品	㈱星光堂薬局	㈱日本プロデュースセンター	
㈱カワマツ	㈱世織書房	日本郵政公社	
関越ソフトウェア㈱	㈱セキヤ	㈱ハードオフコーポレーション	
キヤノンシステムアンドサポート㈱	セコム上信越㈱	㈱ハーモニック	

湧源 YUUGEN

編集後記に代えて

卒業しても、見守ってください

広報委員　高橋　正樹

今号は「卒業お祝い号」です。卒業生の皆さんそしてご家族の皆さん、おめでとうございます。原口先生は本号の「贈ることば」で、卒業後も大学を訪問してください、ということばを寄せてくれました。是非とも、気軽に大学を訪問して下さい。これはお愛想ではありません。本当に来て欲しいのです。卒業後も、皆さんに「自分の大学」としていつまでも温かく見守って欲しいのです。

そのためには、良い大学にすることが重要であることはいうまでもありません。皆さんが心から「この大学を卒業して本当に良かった」「大学に本当に良くしてもらった」と思わないと、一方的に愛着をもって欲しいと言っても無理でしょう。その責任は、教職員にあることはいうまでもありません。その責任を果たさずに学生の声を軽視、無視すれば、いずれ卒業後に、そのリベンジが大学に対する軽視、無視となって帰ってくることは目に見えています。この学生の評価が、在学中もそして卒業後も確実に本学の評価を形成して行くのですから、私たち教職員の一層の努力が求められると思います。

もうひとつ、在学生はもちろん、卒業生や広く社会に大学への親しみをもってもらうために、常に情報を公開し伝達することが大切でしょう。四月からは卒業生の皆さんには、この『国際・情報』誌を通じて大学の近況をお知らせしていきます。また、本学のホームページからもどんどん、情報を発信します。どうか、眼を通していただきたいと思います。また、大学（学校法人）は公益法人の中でも突出した公益性を持っていることから、財務状況や事業内容の広報等での公開が法律で求められようとしています（私立学校法の改正）。これからは、伝えたいことだけでなく、求められている情報のお知らせも広報の役目となるでしょう。そして、それによって、卒業生を初めとするより多くの方々に大学への信頼感と親近感を深めてもらい、本学を「自分の大学」として温かく見守ってもらえるのだと思います。

（次号からは担当者が変わります）